

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：25201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K10857

研究課題名（和文）児童・思春期ケアに活かす看護師のための情動知性の育成モデルの評価

研究課題名（英文）Evaluation of an emotional intelligence learning model prepared for psychiatric ward nurses caring for emotionally-distressed adolescents

研究代表者

大森 眞澄（Omori, Masumi）

島根県立大学・看護栄養学部・教授

研究者番号：20437552

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：児童・思春期病棟看護師が、DVDの視聴とディスカッションを用いたセッションに参加することで情動知性は変化するのかを明らかにすることを目的に、看護師7名を対象に1回90分、全3回のセッションを実施した。オリジナルDVDの視聴とディスカッションをおこない、質的データを収集すると共に、セッションの初回と最終回に情動知能尺度を含む質問紙調査を実施した。7名の看護師（男性3名と女性4名）のうち、感情知能の3つの下位尺度の得点全てが向上したものは7名中3名で、2つの下位尺度のいずれかの得点が向上したものが2名、2名は得点が下がった。得点が下がった看護師2名は、介入前の感情知能の得点が、高い特徴がみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グループアプローチの手法をもとに、平成30年に作成した精神および発達に障がいをもつ児と関わる看護師の体験をテーマとした4編の教育教材（DVD）「子どもに拒まれる」「子どもにハグを求められる」「子どもにアゲアシをとられる」「子どもとぶつかる」を看護師が視聴し、グループ・ディスカッションを実践することは、子どもと関わる支援者の情動知性の育成に部分的に効果があった。また、感情体験のすり合わせは、グループ療法的な効果が期待できると考えた。可視化しにくい情動知性の育成のプロセスを児童・思春期ケアに携わる全ての人に活用可能な方略の1つになりうると言える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of our study was to clarify the process of improving emotional intelligence for psychiatric ward nurses who care for emotionally-distressed adolescents through their participation in 3 learning sessions, which included the viewing of originally-developed videos and group discussions. Our subjects were 7 nurses working in a child and adolescent psychiatric ward who consented to and participated in our study program of three 90-minute sessions with two-week intervals. Three of the 7 subjects showed improvement in all 3 sub-scales of emotional intelligence. Two subjects showed improvement in “intrapersonal EQ” or “situational EQ”； however, the remaining 2 subjects showed a decline in emotional intelligence scores.

研究分野：精神看護学

キーワード：児童・思春期 精神科看護 情動知性 看護師

1. 研究開始当時の背景

(1) わが国の 18 歳未満の障がい児サービスを受けている児は、23.4 万人であり、平成 27 年からの 1 年間で 18.0%の伸び率を示した（厚生労働省、2016）。障がい児の健やかな発達や成長、学習を促すためには、物理的環境の整備と児の個別性を尊重し療育できる人材の育成、すなわちサービスの質の向上が急務である。しかし、障がいの有無に関わらず、児童・思春期にある子どもは、自我の形成の途上にあり、社会的規範と本能的衝動のコントロールの間で葛藤が生じやすく問題行動を引きおこしやすい。いじめや自殺といった深刻な社会問題が後を絶たないのが現状である。また、思春期にある子どもは、大人への抵抗を示す思春期態勢をもっているためその対応は難しい。

(2) そこで申請者らは、児童・思春期精神科病棟における困難な状況下での看護師の感情体験を明らかにし、患児の安全と心の健康を育むには規範のガイドラインを持ちながら、親密な関係性の構築が必要であるとした（大森眞澄他：日本医学看護学教育学会誌 26(3)：55-60, 2018）。さらに児童・思春期精神科ケアにおける困難な場面の DVD を 4 編作成した。また、本研究の基盤には、児童・思春期病棟看護師と小学校教諭の情動知性の発達の違いに関する研究（大森眞澄他：日本看護福祉学会誌 19(2)：1-13, 2014）やグループアプローチの有用性についての研究（大森眞澄他：日本集団精神療法学会誌 29(2)：170-175, 2013.）があり、児童・思春期ケアに活かす看護師のための情動知性の育成モデルの評価のために、グループアプローチの手法を用いて児童・思春期ケアに携わる看護師や特別支援教育に携わる教諭が広く活用可能な方略を導き出すことの必要性がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、精神および発達に障がいをもつ児との治療的な相互交流を可能にする児童・思春期ケアに活かす看護師のための情動知性の育成モデルの評価である。

(1) 児童・思春期ケアのためのオリジナル DVD を用いて、児童・思春期ケアに携わる看護師と特別支援教育に携わる養護教諭の両者にグループ・ディスカッションを行い、情動知性の育成過程を質的記述的に解明する。

(2) 上記の過程の前後で情動知性尺度（EQS）を含む質問紙を用いて情動知性の育成モデルの評価を行い、最終的に児童・思春期ケアに活かす情動知性の育成のための方略を提言する。

3. 研究の方法

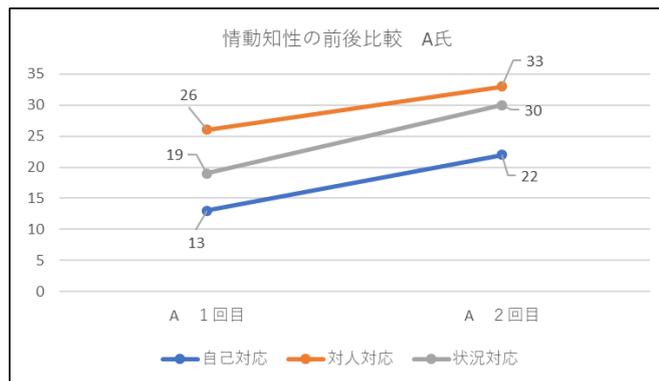
(1) 対象者：児童・思春期精神科病棟に勤務する看護師 10 名程度と特別支援教育に携わる小学校教諭 10 名程度。

(2) 方法：月 1 回の割合で 1 編ずつ計 4 編の DVD を視聴してもらい、その後グループ・ディスカッションをおこない、グループ・ディスカッションの初回と最終回に情動知性尺度（EQS）と平成 29 年度に研究者が発表した質的研究から抽出した困難な状況下での感情体験をスケール化して用い、客観的に数量化し、「児童・思春期ケアに活かす看護師の情動知性の育成モデルの評価」を行う。

4. 研究成果

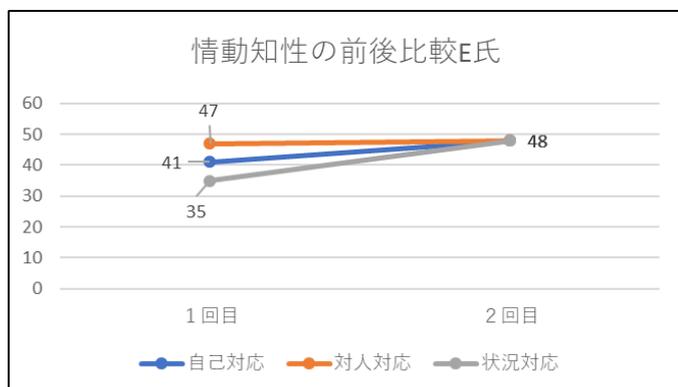
(1) 特別支援教育 5 名の教諭は、男性 1 名と女性 4 名であり、年齢は 30 歳代から 50 歳代、10 年以上の教育経験を有していた。感情知性の下位尺度「自己対応」「対人対応」「状況対応」の 3 つの得点が全て向上したものは 5 名中 2 名だった。また、「自己対応」「状況対応」のいずれかまたは両方の得点

が向上したものが2名、1名は変化がなかった。情動知性の得点が向上した者は、自身の体験と今現在の教諭としてのあり様をすり合わせて語る事が出来た。DVD視聴後のグループ・ディスカッションでは、愛着形成に乏しい子どもの粗暴行為の背景には、子ども自身が傷つく前に他者を攻撃してしまうという思春期態勢への解釈が加えられ、教諭自らの思春期の感情体験が自由に語られていった。思春期の児との関わりを振り返り、集団にコミットした状態で感情を語る事が情動知性の育成に有効であると考えた。



（2）児童・思春期精神科病棟に勤務する7名の看護師は、男性3名と女性4名であり、年齢は20歳代から50歳代、4～21年の看護師経験を有していた。感情知性の下位尺度「自己対応」「対人対応」「状況対応」の3つの得点が全て向上したものは7名中3名だった。また、「自己対応」または「状況対応」のいずれかの得点が向上したものが2名、2名は得点が下がった。情動知性の得点が向上した者の語りは、自身の体験と育児の体験や辛い体験を率直に語っていた。情動知性の育成には、ネガティブな感情の共有が重要である。

（2）児童・思春期精神科病棟に勤務する7名の看護師は、男性3名と女性4名であり、年齢は20歳代から50歳代、4～21年の看護師経験を有していた。感情知性の下位尺度「自己対応」「対人対応」「状況対応」の3つの得点が全て向上したものは7名中3名だった。また、「自己対応」または「状況対応」のいずれかの得点が向上したものが2名、2名は得点が下がった。情動知性の得点が向上した者の語りは、自身の体験と育児の体験や辛い体験を率直に語っていた。情動知性の育成には、ネガティブな感情の共有が重要である。



<引用文献>

- 1) 大森眞澄他：児童・思春期精神科病棟における困難な状況下での看護師の感情体験，日本医学看護学教育学会誌，26（3）：55－60，2018.
- 2) 大森眞澄他：児童・思春期病棟看護師と小学校教諭の感情知性と心の健康及びエゴ・レジリエンスの比較，日本看護福祉学会誌，Vol.19, No.2：1-13，2014.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Masumi Omori, Teruko Ishibashi, Shin-ichi Yoshioka, Hiroji hara
2. 発表標題 Evaluation of an emotional intelligence learning model for teachers of special support education for emotionally-distressed adolescents
3. 学会等名 International Association of Risk Management in Medicine, 9th World Congress of Clinical Safety (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masumi Omori
2. 発表標題 Evaluation of an emotional intelligence learning model prepared for psychiatric ward nurses caring for emotionally-distressed adolescents
3. 学会等名 The 14th International Nursing Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石橋 照子 (Ishibashi Teruko) (40280127)	島根県立大学・看護栄養学部・教授 (25201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------